

NEWS

本年度より、自己点検・評価についてのコーナーを設けました。



モウリスの 自己点検にゆーす

vol.2

2012(平成24)年6月9日実施の外部評価委員会と結果についてお知らせします。

外部評価委員会って何?

本学では「立正大学外部評価委員会細則」を定め、本学が実施する自己点検・評価について、外部評価員に検証及び評価と本学の教育・研究等の質の向上に資する提言をお願いすることとしています。

認証評価・第三者評価とは違うの?

第三者評価とは、「評価対象機関とは独立した第三者組織によって選定された評価者・評価項目等に従って行われる評価」で、認証評価機関が行う評価はこれに当たります。一方、外部評価とは、「学外の評価者によって行われる評価」ではあるものの、「評価者及び評価項目が評価対象機関によって選定される」評価のことを指します。(NIAD-UE『高等教育に関する質保証関係用語集』3rd Editionより)

今年度本学では、第1回外部評価委員会を2012(平成24)年6月9日に実施し、その結果を7月9日付報告書として受け取りました。

今後、報告書で指摘された点について、自己点検・評価委員会を中心に順次検討・対応していきますが、構成員の一人ひとりが主体的に自己点検・評価にあたることできるよう、以下報告書本文(一部抜粋)を掲載します。

平成24年度 立正大学外部評価委員会 報告書

1.総括(抜粋)

建学の精神、学部の教育目的、ブランドビジョン等、教育・研究に係る理念について、各学部のカリキュラムにおける具体化がやや弱く、大学として目指す姿に多少不明確さが感じられる。社会連携・社会貢献を含め、大学としてどのような姿を目指していくのか、学外者からははっきりとわかるように示していくことが期待される。

教育研究を安定して遂行するために必要かつ十分な財政基盤を確立しており、予算編成および予算執行も適切に行われている。しかし、長期財務計画が公表されておらず、法人と大学間の連携についても十分に明文化されていない。資産運用委員会が、「資産運用委員会要領」で不定期開催となっている点とあわせ

て、改善が望まれる。

各学部・研究科で行っている自己点検・評価で、高い評価を付している部分について、現在行っている特段の取り組みが説明できていない部分があるなど、一部客観性に欠ける面が散見されるが、2011(平成23)年度自己点検・評価報告書は現状を説明し、おおむね適切に点検・評価を実施し、将来に向けた発展方策を記述していると判断できる。

2.評価できる事項

(1)初年次教育科目として全学で「学修の基礎」を開発し、共通テキストを用いる等システム化を行っていること、および、一部学部では、建学の理念についての教育を仏教学部の教員により行っていることは評価できる。

(2)法学部におけるTOEFLの学内試験は、今後クラス編成や留学への効果が期待でき、評価できる。今後の全学的な展開も期待される。

(3)内部質保証について、社会に対する説明責任を果たし、そのためのシステムを整備し、適切に機能させている点は評価できる。

3.改善が必要な事項

(1)自校教育の対応は、学部ごとにばらつきがあり、建学の精神を具現化するという観点から、改善が望まれる。

(2)指定校推薦の入学定員と入学者数に乖離があり、是正されたい。ただし、指定校推薦枠の削減等、すでに対策の検討を開始している学部もあるため、結果が期待される。

(3)心身に障がいのある学生への生活支援に不十分な点があり、より一層の努力が必要である。全学的統一方針の下での対応に加え、学生の要望と環境のミスマッチがないよう、入学時に大学としてどれだけの支援ができるのかを明示することも望まれる。

(4)教育・研究の成果を社会に還元する面で、広報・周知を含め不十分な点があり、改善が望まれる。

RISSHO UNIVERSITY
FD NEWS LETTER vol.8

平成24年9月28日発行
編集発行：立正大学学長室政策広報課
〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16
TEL:03-3492-5250 FAX:03-5487-3340
URL:http://www.ris.ac.jp/

「モウリス×エキスパート」を育む。

立正大学



2012年、開校140周年。

RISSHO UNIVERSITY

FD NEWS LETTER

立正大学FD(ファカルティ・ディベロップメント)だより



- 1 「主体的に考える力」を育てる「学修総時間の確保」(教務委員長(心理学部教授) 岡本淳子)
- 2 予測困難な時代における大学教育(FD担当副学長 吉岡 茂)
- 3 立正大学FD活動報告(平成24年度～)・FD用語集
- 4 自己点検にゆーす

発行日
平成24年9月28日
URL
http://www.ris.ac.jp/

「主体的に考える力」を育てる「学修総時間の確保」 教務委員長(心理学部教授) 岡本淳子

平成24年3月26日に、中央教育審議会大学分科会大学教育部会から「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ)が、出されました。

その中で伝えられている学修の進め方については、今後の教員による授業への考え方やシラバス作成等においても重要な観点になると考えますので、この機会にお伝えいたします。

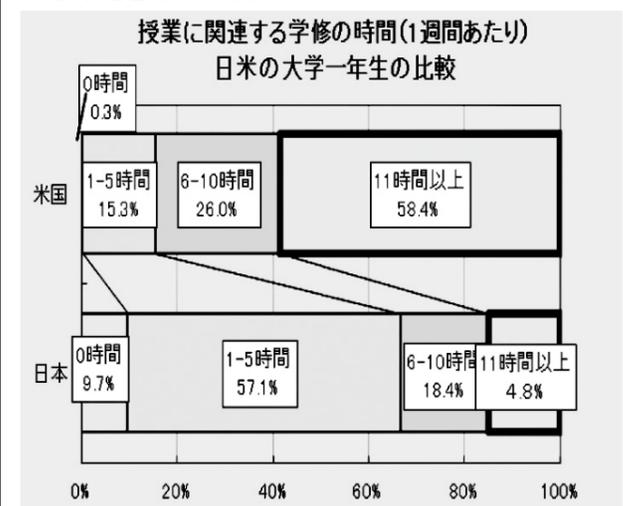
社会経済の構造的な変化や、多領域でグローバル化が進む予測困難な時代にあって、大学における学修が、学生の人生に「個人として発展する基盤」を育てるものであるか否かは切実な課題となります。具体的には、「生涯学び続け」、「主体的に考える力」の育成が重要とされています。そして、その実現にあたっては、授業の事前準備、授業、事後の展開を含めて質の高い能動的な学修が必要であるとされ、主体的な学びに要する「総学修時間の確保」が不可欠であることが強調されています。

大学制度において、1単位は授業前後の主体的な学びを含めて45時間の学修を要する内容で構成することが標準とされています。卒業要件は原則として4年以上在学することと124単位以上の修得であることを踏まえると、学期中の一日当たりの総学修時間は8時間程度であることが想定とされています。しかるに、我が国の学生の学修時間は、その約半分の一日4.6時間との調査結果もあり、アメリカの大学生と比較しても少ないことが指摘されています。参考に、日米の大学1年生の学修時間の比較を、図に示します。(右図参照)。

ちなみに、立正大学でも、つい先日、平成24年度1期授業改善アンケート結果がまとまったところです。回答項目には、「該当科目の授業外学習時間」を尋ね

ている問いがありますが、学生の評価は他の項目に比べて低い評価になっています。学修時間が短いということは、単に学生の不勉強だけが課題になるものではなく、教員の授業のあり方と統合して考える課題となると考えられます。今後に向けて、それぞれの教員が、あるいは教員同士、学科、学部、全学的課題として授業のあり方やその体系について考えていくことが必要となってきます。具体的にはシラバス作成に取り組む際には、各教員にとって重要な配慮事項になってくると考えられます。

学生たちは学修時間の少ないことを率直に表現していますが、積極的に授業に参加できた時には力強く満足感を表し、喜ぶ姿も見せてくるのを、先生方も多く経験されておられると思います。授業や教育を通じて、学生と何を分かち合って学生に何を育てていったらよいか、それぞれにイメージを膨らませていきたいものだと考えます。



出典：東京大学大学経営政策研究センター(CRUMP)「全国大学生調査」2007年、サンプル数44,905人 http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/ NSSE(The National Survey of Student Engagement)

予測困難な時代における大学教育

FD 担当副学長 吉岡 茂

「人間力」の育成

この3月に中央教育審議会から、「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」のタイトルを掲げた「審議のまとめ」が公表されました。「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成するため、「学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛え、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした教育が保証されるよう、質的に転換する必要がある」というものです。

30数年前「不確実性の時代」(ガルブレイス)といった言葉が流行しましたが、今から考えると、それでもまだ過去からの延長線上で安心して生きてゆける時代でした。しかし今日では、経済のグローバル化や少子高齢化、情報化による急激な社会の変化の中、労働市場や産業・就業構造の流動化などによって将来予測が困難になっている今の時代を生きる若者や学生にとって、大学での学修が次代を生き抜く基盤となっているかどうか切実な問題です。

我が国の大学教育が直面している重要な課題のひとつは、「人間力」の育成です。予測困難な時代にあってもどのような事態にあっても基本的な対処力をもった人間を育成することです。単刀直入に表現すると、問題発見・問題解決のできる人間の育成です。

卒業生の本学教育の評価

実際に社会の第一線で活躍している本学の卒業生が、本学で受けた教育についてどのように感じているのでしょうか。この4月から5月にかけて、社会人3年目を迎えた卒業生約2,300人にアンケート調査を実施しました。回収率が5%程度と決して高くはありませんでしたが、図1は学部卒108名のアンケート結果を要約したもので、「本学で学んだ内容」については78%が満足していることが分かります。また「現在の仕事に役立っている」が、「非常に役立っている」と「まあ役立っている」を合わせると50%になりますが、これを学科別(カッコ内数値は回答数)に示したのが図2です。回答数が少ないため断定的な評価は不可能ですが、学科によっては「役立っていない」の割合が高いことが分かります。カリキュラムや就職先について検討する必要があるかも知れません。

大学教育は決して「役立つ」ことのみを目指すものではありませんが、実社会で生き抜くための「人間

力」の向上について意識することも大事であると思います。

また「大学で、身につけておけば良かった能力」(複数回答)で一番多かったのが「パソコンスキル」で、次いで「人間力」「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション力」「資格取得」「専門能力」「教養」といった順番でした。しかし、パソコンスキルから最後の教養まで、すべて「人間力」を構成する要素です。要するに総合的な能力を身につけておくべきだった、ということだと思えます。

今後もこうした卒業生アンケートなどを活用しながら、現代社会の「予測困難な時代」においても本学卒業生が自信を持って活躍できるようカリキュラムや教育方法の改革に取り組んでゆく必要があります。

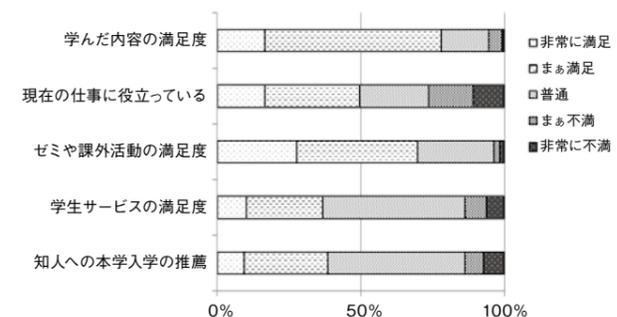


図1 アンケート結果(全学)

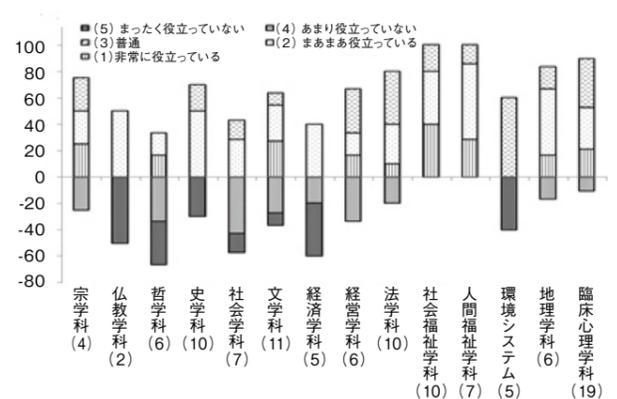


図2 「現在の仕事に役立っているか」

表1 「身につけておけば良かった」能力

内容	割合(%)
パソコンスキル	43.1
人間力	34.9
プレゼンテーション	10.1
コミュニケーション	9.2
資格	8.3
専門能力	7.3
教養	4.6

(注)回答者数に対する割合

立正大学FD活動報告(平成24年度～)

FD研修会

日時:平成24年6月6日(水) 16:10～17:40
場所:立正大学 大崎キャンパス1号館1階 第3会議室
熊谷キャンパス1号館第1会議室
(遠隔教育システムによる両キャンパス同時開催)
テーマ:「学習ポートフォリオの活用方法」について
第1部:森本康彦氏 東京学芸大学情報処理センター准教授

森本准教授は「教育の質保証をめぐる動き」や「学習・評価観のパラダイム変換」について説明され、その後、学習ポートフォリオについて、ご自身の活用方法をご紹介されました。また、「Web Class」を活用した授業なども紹介されました。



FD講演会開催のお知らせ

日時:平成24年11月26日(月) 16:10～17:40
場所:立正大学 大崎校舎第6会議室・熊谷校舎第1会議室
(遠隔教育システムによる両校舎同時開催)
テーマ:評価尺度のルーブリックの活用方法について
第1部:土持ゲーリー法一氏
帝京大学高等教育開発センター長教授

「私のFD活動」～研修会に参加して～

地球環境科学部 特任講師 貝沼 恵美

去る8月8・9日に浜松市で開催された「平成24年度FD推進ワークショップ」に参加しました。これは専任となって5年以内の教員を対象としたものであり、平成24年7月現在で124大学が加盟する(社)日本私立大学連盟が主催しています。今回は8月6・7日のA日程と8・9日のB日程で、合計146名(立正大学からは7名)が出席しました。

ワークショップの初日は、全体説明の後、昨年度参加の3名のパネリストによるワークショップ参加の意義に関する話がありました。そこでは教育に対する考え方、学生との接し方、あるいは授業における配布資料の作成方法などに関し、ワークショップの前後でどのように変化したかなどが示されました。

そのあと、専門の異なる6～7名から成るグループに分かれ、担当委員の先生より翌日の模擬授業に向けての説明があり、各自約90分で15分間の授業計画書の作成を行いました。

2日目は、各グループで1人15分の模擬授業を行ったあとに15分間の質疑応答が行われました。とはいえ、この質疑応答では専門的な内容については論じられず、授業の進め方、効果的な板書の方法などに関して意見が交わされました。

皆、分野が違いため、授業内容や説明の仕方などは異なるものの、参考となる授業方法もあり、自身の授業でも是非取り入れたいと思うものも少なくありませんでした。また新任として抱える問題や疑問には共通性も多く、学生の集中力を持続させる方法、パワーポイントの効果的な使い方など、その解決に向けてのディスカッションができたことは有意義でした。最後になりましたが、このFD研修会受講の機会を与えてくださった学部長をはじめとする関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

FD用語集

アクティブ・ラーニング

問題発見・解決型の能動的学修の総称。教員と学生の意思疎通の確保を図りながら学生同士が切磋琢磨することで、学生の思考力や表現力を引き出すための双方向型授業、演習、実験、実習や実技などを中心とした教育。教室外では体験学習、調査学習等があり、教室内ではグループ討論、ディベート、グループ・ワーク等がある。予測困難な時代のなかで、生涯にわたって学び続け、主体的に考え問題を発見し、問題解決のできる人材養成に効果がある。経済学部で導入しているクリッカーは双方向型授業の形成に効果的であり、本学で導入している学習ポートフォリオは、学生同士がレポートを見せ合いながら、思考力と表現力を高めるような学修を可能にしている

コース・ナンバリング

授業科目に適切な番号を付し分類することで、学習の段階や順序等を表し、カリキュラムの体系性を明示する制度。例えばシラバスをナンバリングして、履修の順序や対象学生を明示する体系化を行うこともできる。ナンバリングによって、(1)学内における授業科目の分類、(2)複数大学間での授業科目の共通分類が可能になる。学生にとっては、各人の目的に沿った授業科目を計画的・適切に履修する際の指標となる。一方、教員にとっては自身が担当する科目の位置が明確になるため、個々の授業科目の充実に専念できる等の効果がある。なおカリキュラム・マップは、学位授与方針がどの授業でどのように達成されるかといった関係を一覧表にしたもので、個々の授業が果たすべき役割と授業同士の有機的な結びつきを明示する。シラバスだけではわかりにくかった大学全体のカリキュラム構造の把握が容易になる。